



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第二三六号）

寒露 かんろ

十月八日

帯締め

十月。二十四節気は「白露」はくろから「寒露」かんろへ、寒い露とは早くも晩秋を思わせる表現です。実際の最低気温も、九月の十九・六℃から十月には十三℃（津気象台・小俣観測）と六℃あまり下がり、朝夕には冷えを感じることも。秋の装いが本格的になります。

着物は十月に「単衣」ひとえから「袷」あわせに変わります。秋の袷に合う帯締めを求めて、伊賀くみひもの「くみひも平井」を訪ねました。伊賀くみひもというと、帯締めが定番ですが、意外にも明治後半から作られるようになったと聞きました。起源は奈良時代以前といわれる伊賀くみひもは、主に仏具や武具の紐を作ってきました。大きな軋機を迎えたのが、明治九年（一八七六）の「魔刀令」まどうれいです。それまで鎧や刀など武具に使われていた紐くみひもの需要がなくなり、産地は打撃を受けます。そこにもたらされたのが、江戸組紐の技術。同三十五年（一九〇二）広沢徳三郎氏が東京から組紐の技術を習得して伊賀へ帰り、糸組工場を設立し、帯締め・羽織紐はおりなどを生産するようになったのです。たしかに時代劇の着物姿は、江戸時代では帯締めは見かけず、明治に入り、布で綿をくるんだ「丸ぐけ」がお目見えし、やがて帯をお太鼓結びにして、組紐の帯締めや帯揚げを使う今のスタイルに変わってきています。日本古来のイメージをもつ着物も、その装いには様々な変化があったのです。そこには組紐の産地として生き残りをかけた伊賀の革新と努力があったことはいまでもありません。

着付けの最後に結ぶ一本の帯締め。最後の肝心な仕上げにも、多くの人々の想いが込められていたのです。

文 千種清美

